

高畑

奈良学園セミナーハウス
奈良県指定有形文化財
志賀直哉旧居
(しがなおやきゅうきょ)



①歴史・概要

志賀直哉さんが自らデザインし、昭和4年から9年間、家族と共に過ごした住まいです。「記念碑の類は一切断ること」という遺言によって、名称は記念館と呼ばず旧居としております。

戦後、進駐軍接收の後、長年、国の保養施設として活用されましたが、解体を惜しむ保存運動を背景として、学校法人奈良学園が管理・公開することとなり、以降45年を経ております。この間、志賀家ご遺族の記憶や所蔵写真などを参考に大々的な修復・復元工事を重ね今日に至っております。

志賀直哉さんが奈良に住まうようになったお目当の第一は、春日の杜の新緑です。それまでにも幾度かの転居を重ねましたが、結局育った東京の次に長く奈良に住まったことになり、奈良の地が如何に気に入っていたかが推察されます。印象派の絵画を鑑賞して鍛えた審美眼と、たびたびの転居で培った住まいの居住性についてのノウハウがこの建物の設えに如何なく発揮されています。「必要なことだけを単純化して、美しい所を備えていれば、居心地よい家になる」とも書いています。

鹿鳴館以来、西洋かぶれの続いている時代でしたが、しきたりや流行に左右されず、和風、洋風の良いところを直に取り入れ、全体をアールデコ風にまとめたのがこの住まいといえるかもしれません。まるで、直哉の簡潔な文体を目の当たりにするようだという感慨を述べる入館者もおられます。白樺も含めさまざまな建築素材や建具に薫習された志賀直哉さんの徳を味わってください。



②見どころ

いずれの部屋も窓を広く取り、外の自然と建物の自然ぶりが程よく調和して心が落ち着くという体験を促します。小林多喜二さんも一泊した二階客間からみはらせる春日の杜が絶景です。一階書斎の広い窓も池庭の景色を額縁のように提供します。門前から想像するよりも建物が奥に深いということは、直哉さんが仕組んだサプライズではないかと思われます。奥に控える二十畳の広さの和洋折衷の食堂と、その奥のサンルームは、まるで毎月50人以上の来客があることを予想したかのように設計され、今日に至っても広々とした悠然たる雰囲気醸し出します。